

豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む (4)

阿部 聖

Introduction of the Diary of Air-raid in Toyohashi Area during the Pacific War Written by Uzuhiko Toyota, Part4

Sei Abe

要約：本稿は、前号に引き続き『豊橋地方空襲日誌』第二冊の1月21日から31日のB-29の来襲に関する記述を、米軍資料により裏付けつつ解説を加えたものである。1月23日（名古屋）、1月27日（東京）の大規模爆撃だけでなく、日々行われる気象観測爆撃及び写真偵察任務のB-29またはF-13の来襲についても合わせて検討している。とくに気象観測爆撃機は、爆弾を搭載して出撃し、その名の通り気象観測と爆撃を合わせて行った。通常は、マリアナ諸島から1機ずつ1日に3回出撃し、連日連夜、東京、名古屋、大阪の目標を爆撃した。合わせて、1941年に改正された防空法に関連して、空襲に対して市民がどのような義務を追っていたのかについて言及した。

キーワード：大規模爆撃、気象観測爆撃機、写真偵察機、防空法、待避所

(本誌第4巻第1号より続く)

一月二十一日（土）

前夜七時侵入の敵機は一機で、大坂付近に投弾した^{ママ}が高射砲弾により火を噴いて遁走。続いて十一時半頃潮岬から大坂上空に侵入、投弾することなく和歌山、高松を経て脱去。更に本朝五時半頃、紀伊水道から侵入、大坂付近を偵察の後、田辺町附近の海中に投弾して脱去したといふ。

こうした頻々たる侵入は、坂神地方再襲を意味するものとして注意せねばならぬ処であり近接せるこの地方また決して安閑として居る訳には成らぬと考へる。

察の目標が関西、瀬戸内地方であったためか、日誌にはあまり切迫感が感じられない。しかも、1月21日の日誌の記述は、軍のラジオ情報または新聞がその源泉であると考えられる¹⁾。第9表に、米軍資料（作戦要約）をもとに、1月20～22日の作戦任務を整理した。日本到着予想時間は、サイパン出撃時間（K時）を日本時間に直したものに、往路に最低限必要とされる時間として7時間を加えたものである。これを参照しながら日誌を読むと、「昨夜七時侵入の敵機」は、WSM127、「続いて十一時半頃から大坂付近に侵入」したのは、WSM128、「本朝五時半頃、紀伊水道から侵入」したのはWSM129であると言えよう。

[解説] 1月20～21日の気象観測爆撃及び写真偵

到着予想時間、20日9時及び21日8時57分の

1) 1945年1月22日付『朝日新聞』は、「二十日夜から二十一日払暁にかけてマリアナ基地よりB-29各一機が三次に互り大阪および紀伊水道方面に来襲した。第一次は二十日午後七時過ぎ四国方面より侵入、大阪市内に若干の爆弾を投下したが損害は極めて軽微で敵機はわが高射砲の猛撃により右発動機より火を噴きつつ脱去した、第二次は同日午後十一時半ごろ潮ノ岬方面より侵入したが投弾することなく和歌山、高松を経て南方に脱去、三次は二十一日午前五時半過ぎ紀伊水道方面より侵入、田辺附近の海中に投弾して南方に脱去した」と報じている。日誌の記述と極めて類似していて興味深い。なお、B-29の少数機での来襲に関しては、新聞もかなりの程度まで報道している。

第9表：1月20～22日、米軍の気象観測爆撃及び写真偵察作戦

月日	作戦	出撃時間 (K時)	出撃時間 (日本時)	到着予想時 間(日本時)	目標(地域)
1月20日	WSM127	201251K	201151	201851	大阪
	WSM128	201735K	201635	210507	大阪
	WSM129	202307K	202207	210507	大阪
	3PR5M19	200300K	200200	200900	明石
1月21日	3PR5M20	210257K	210157	210857	呉
1月22日	WSM130	221313K	221213	221913	名古屋

(出所) 前掲, 作戦要約 (Operational Summary) より作成。

写真偵察機²⁾ (3PR5M19と3PR5M20) については、目標地域及び飛行ルートが中部地域から大きく離れているため警戒警報が発令されなかったものと考えられる。

第9表では、22日にWSM130が名古屋地域に來襲したことになるが、日誌にはこれについての記述がない。警戒警報が発令されなかったためと考えられる。というのは、浜松市近郊の豊西村 (1944～45) 『豊西村空襲記録』によれば、19時27分に空襲警報が発令されているが、侵入の様子を「御前岬ヨリ静岡, 東部軍地区ニ侵入」としているからである。米軍資料によれば、「高度15000フィート上空でレーダーが機能しなかったため、名古屋工廠の代わりに、222045K (日本時間221945) に目視で静岡を爆撃した」³⁾ とある。

一月二十三日 (月)

(59) 余震も漸く遠退き、敵機の侵入も二三日途絶へたので誰しものがのんびりした気持。然し油断はならないので、夜、組常会だったがあっさり切り上げて早めに寝た。

夜半ふと目を醒すと警戒のサイレンが鳴つて居る。

時は午前一時半、ソラ来たとはね起きたが、初めの情報を聞き洩したのでその行動が詳かでない。次の情報で、敵は浜名湖方面から南方洋上に進走中とあつて、あつさり警報は解除。この間僅かに十分間。

侵入一機 浜名湖西方の山林に投弾脱去

(60) 朝の早い自分は、もう五時には起きて焚火に暖をとつてゐた。夜はまだ明けないのに、友軍機は哨戒をつづけて居るらしい。暫くすると警戒のサイレンが鳴り出した。先に友軍機の哨戒飛行と思つたのは、豈図らんや浜名湖方面から侵入し名古屋に向ふ敵機だったのだ。何れまた侵入口のこちらへ戻つてくるに違いないと緊張待機してゐると、忽ち西の方から爆弾の炸裂らしい轟音が聞へて来た。爆弾とすれば五六発らしく、余り遠い所でもないやうだ (後に御馬^{オンマ}だつたときいた)。素破、敵機と出て見ると西の方から例の特徴あるウンウンの爆音が聞へる。姿は見へぬが頭上に近いらしい。退避の鐘に早速婆さんを壕に入れ自分も入りかけた。注意するとやや南寄りに聞へるので、そのまま耳を傾けてゐると間もなく彼方の空に消へ、程なく警報は解除。敵が焼夷弾を落したか、東の山が熾んに燃えてゐる。

侵入機一機 名古屋に少数 投弾脱去

2) 写真偵察機の動向については、工藤洋三 (2011) 『米軍の写真偵察と日本空襲』 175頁も参照。

3) 静岡に対して、高度29000フィートから250ポンド一般目的弾20発を投下した。ただ、1945年1月24日付『朝日新聞』は、「静岡方面より侵入した敵機は伊豆半島北部山林に爆弾及び焼夷弾を投下」としている。なお、米軍資料 (作戦要約) からWSM130の攻撃目標は、熱田の陸軍造兵廠であったことが分かる。とはいえ、同資料には、目標地域は記載されているが個別攻撃目標は記載されていないことがほとんどである。これを知るためには、作戦ごとの任務報告書が必要となるが、現在のところ入手できていない。

(61) 定期便には一日だけ早い今日午後一時半、突如警戒警報が発令され、高く低く鳴り渡るサイレンを合図に待避の姿勢に入る。情報によると敵は、二編隊になり約十分の間かくを置いて十五機と十四機で潮岬から侵入し、坂神めざしてやって来た。その内一支隊が琵琶湖に出て東進、名古屋を襲ふらしい状況に。二時二十分東地区にもまた空襲警報が発令された。

別に東の方、沼津、蒲原附近にも少数機が侵入を報ぜられたが、これは友軍機だったと取消があつた。哨戒の友軍機が一機二機、鮮かな雲を曳いて旋回してゐるのが頼母しい。

かくて敵は坂神を侵した後、次々に名古屋をめざしてやつてくる。二時半、名古屋上空に十五機ありといふ情報を聞いて、愈々敵がここへやつてくるの間もあるまいと緊張して待つてゐると、西北の方から何ともいへぬ物すごい爆音が地響きしてやつて来た。ハツと思ふ間もなく敵編隊が十五機と八機、二群れになつて北寄り空を東の方へ逃げてゆく。その内一機は、被弾したのか編隊から遅れがちについてゆく。こやつら三時頃静岡の南方から洋上に脱去したといふ。

三時頃、二度目の敵三編隊が潮岬から侵入して来た。これも坂神地方を侵して名古屋をめざしてやつてくる。三時五十分、西から東へ雲を曳いて頭上を横ぎる四機がある。よく見ると、それは正しく友軍機だ。このとき又々地響がして物すごい音が聞へてくる。一時地震の襲来かと思つたが、そふでもないらしい。すると後から例のウンウンの爆音だ。漸く頭上に迫つてくるので、又々待避の鐘が鳴る。壕の中に身をかがめてゐると上空では機関砲の音がしきりと聞へる。友軍機の邀撃に相違ない。それが漸く遠ざかつてゆくらしいので出て見たが天一杯の雲でさっぱり見へない。

一時間をおいて又々物すごい音が地響きして聞へてきた。又敵が来るのかと目を見張つてゐると、四時五分、果してまたやつて来た。三度目の待避信号があわただしく鳴る。これは頭上より南にそれ、東南に向つてゆくらしい。そのまま見送つてゐると、爆

音はまもなく空の彼方に消へて仕舞つた。これを最後としても敵は全部脱去したので、四時二十分、空襲警報が、同三十分、続いて警戒警報も解除され、お互に緊張を解いて、婆さんは夕餉の支度にかかつた。

来襲七十数機 撃墜十三機 撃破五十機

(62) 午後八時もうそろそろ寝やうと思つてゐると警報のサイレンがまた鳴り出した。どうせ今夜は様子見ながらやつてくるものと心待ちしてゐた程だから誰しも落付たものだ。

今度も敵めやはり昼間のコース通り潮岬から侵入、坂神を経てやつてくるといふ。情報で関ヶ原附近を名古屋に向ふらしいといふ。その頃また昼間と同じ様な物すごい音が地響きしてやつて来た。爆弾だといふ人もあれば、地震だといふ人もあるが判断がつかかぬ。然し敵の通る度毎に聞える処を見ると、爆弾らしくもある。爆弾とすれば三発や五発の音ではないのに、一機でそんなに落す筈もない。何れにしても不可解の音だ。

暫くすると果して敵めが一機でやつて来た。退避の鐘が一想到鳴る。だが敵は遙か南方を洋上に向つてゆくらしい。これが通つて仕舞つた頃、情報で敵は名古屋の南方村落に投弾した後、今岡崎の南方を東南に向つて脱去しつつあると。つまり情報はそれだけ遅れて発表になるのだ。

けふは朝からこれで四度目。幸にしてこの附近に何等の被害もなく、女子供の肝を冷ただけで済んだは結構だが、昼の邀撃戦で友軍機が一機八幡村⁴⁾附近へ墜落大破したと聞いて、暗然たる気持ちをどうすることも出来なかつた。

侵入一機 大坂、名古屋を経て 南方に脱去
投弾あり

[解説] 1月23日には、名古屋地域を目標とする、通常の気象観測爆撃任務を挟むように、名古屋三菱重工発動機製作所を目標とする大規模爆撃が行われた。第10表にその概要を示す。この日は先ず、「夜半ふと目を醒すと警戒のサイレン

4) 現在の豊川市八幡町。

第10表：1月22～23日の米軍の大規模爆撃，気象観測爆撃

月日	作戦	出撃時間 (K時)	出撃時間 (日本時)	到着予想時 間(日本時)	目標(地域)
1月22日	WSM131	221825K	221725	230025	名古屋地域
	WSM132	222022K	221922	230222	名古屋地域
	Major Strike- Mission No.22	222115Z～ 222235Z	222015～ 222135	231315 231535	名古屋三菱重工 発動機製作所
1月23日	WSM133	231333K	231233	231933	名古屋地域

(出所) 第9表に同じ。

が鳴つて居る」から始まる。時間は「午前一時半」としているが、WSM131の日本到着予想時間は00時30分頃である。豊西村(1944～45)は、警戒警報発令00時31分、警戒警報解除が01時26分として「西方ニ投弾アリ、知波田トノコトナリ」と記録している⁵⁾。日誌の筆者の眠りが深かったのか、目覚めた時は警戒警報解除まで10分前頃であった。

米軍資料によれば、WSM131のB-29は豊橋の中心部(北緯34度45分・東経137度20分)に250ポンド一般目的弾20発を投下した。この緯度経度は、豊橋の中心部ではなく、神野新田、現在の豊橋総合スポーツ公園の南側にあたるが、日誌にも豊橋市(1958)『豊橋市戦災復興記念誌』にも被爆の記載はない。唯一の手がかりは豊西村(1945～44)の「知波田トノコトナリ」であるが、三ヶ日町(1987)『三ヶ日町史(下巻)』にはそうした記述はなく、被弾場所は不明である。

その後、「五時には起きて焚火に暖をとつて」しばらくすると再びサイレンが鳴る。第10表では、WSM132は222022Kに出撃したことになっているが、実際に日本に到着した時間は05時過ぎであるので、米軍資料は222322Kまたは

222222Kの誤植と考えられる。前後のWSM129とWSM135の出撃時間はそれぞれ23時07分、22時10分などとなっている。米軍資料はまた、WSM132のB-29の爆撃時間を230618K(日本時間23日5時18分)としている。警戒警報は05時過ぎに発令されたとみて間違いないだろう。豊西村(1944～45)は、警戒警報発令05時11分、警戒解除05時32分としている。

この日2回目の来襲(WSM132)について日誌は「西の方から爆弾の炸裂らしい轟音が聞えて来た。爆弾とすれば五六発らしく、余り遠い所でもないやうだ(後に御馬⁶⁾だつたときいた)」とし、警報解除後には「東の山が熾んに燃えている」のに気づく。「東の山」の火災については不明であるが、「余り遠い所でもない」被弾地については、御津町(1990)『御津町史(本編)』は、「本町最初の被爆は、同じ二〇年の一月二三日の未明、森下⁷⁾に投下された一九発で、幸い死者は出なかった」(667頁)と述べている。

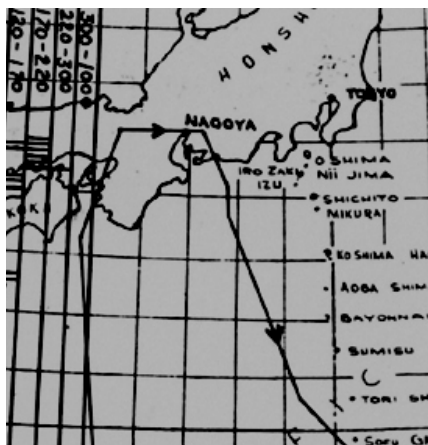
そして、日本時間の22日の20時15分から21時35分にサイパンのアイズリー空港を第73航空団のB-29、73機⁸⁾が離陸した。1機当たりの搭載爆弾は、500ポンド一般目的弾7発、500ポ

5) 1945年1月24日付『朝日新聞』は、「二十三日午前零時三十分すぎ駿河湾方面より侵入した敵機は浜名湖西方山林に投弾」という記事載せている。

6) 現在の豊川市御津町御馬。

7) 現在の豊川市御津町豊沢。御馬と豊沢はそれほど離れてはいない。

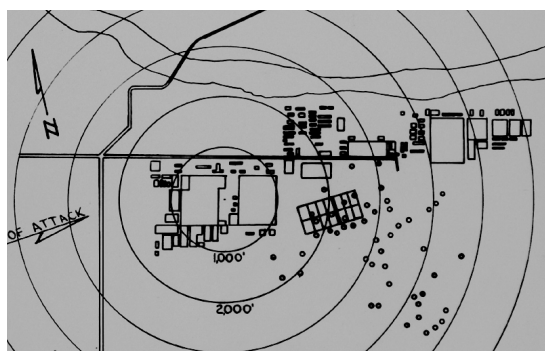
8) 離陸が予定されていたのは76機であったが、エンジン故障などで3機が離陸に失敗した。



第23図：1月23日の飛行ルート



第25図：名古屋三菱重工発動機製作所の航空写真
(日本時間14時46分)



第24図：名古屋三菱重工発動機製作所の着弾プロット (大きな円の中心が照準点)

ド焼夷弾 (M-76) 5発であった。第1目標は名古屋三菱重工発動機製作所 (大幸工場)⁹⁾ とされ、第1目標が目視で爆撃できない場合は、目視またはレーダーで名古屋市街地 (第2目標) を爆撃することになっていた。出撃時間は222115~222235Z¹⁰⁾ (日本時間230615~230735) であった。指定された飛行コースは、紀伊半島の西端を北上し、大阪湾を経て琵琶湖に達し、いわゆる琵琶湖の首付近をIPとして名古屋へ向かい、爆撃後は浜名湖付近を離岸地点として海上へ抜けるものであった (第23図参照)。

部隊が日本に接近するにつれて雲量が増加

し、目標上空の高度14000フィートでは、ほぼ全体が雲に覆われていた。結果的に、わずかな雲のすき間から28機が第1目標を爆撃し、0535~0547Z (日本時間14時35分~14時47分) に高度25300~27200フィートから332発、83トンの爆弾及び焼夷弾を投下した。また、27機が0641~0701Z (日本時間15時41分~16時1分) に高度24700~29890フィートから名古屋市街地に324発83トンを投下した。なお、5機が臨機の目標として、新宮 (3機)、岡崎 (1機)、谷川 (1機) に爆弾を投下し、5機が爆弾懸架装置の故障等により投下に失敗した。

爆撃の結果は、満足のものではないと考えられた。第1目標の照準点の1000フィート以内に爆弾は命中しなかったし、名古屋駅の周辺に命中したのはわずか15発に過ぎなかったからである (第24図、第25図参照)。

米軍資料によれば、日本側の反撃は激しかった。同資料は、高射砲とともに航空機による延べ626回の攻撃があった¹¹⁾。しかも、米軍の編隊を待ち受ける場所が適切であった。また、目標地域で攻撃の激しさを増したと記している。この結果、大王崎の東45マイルでB-29、1機が撃墜された。また、放射砲によりB-29、8機が損害を被った。

9) 現在の名古屋ドームの東側、矢田川の南側一帯。

10) 大規模爆撃の際にはサイパン時間 (K) ではなく、グリニッジ時間 (Z) を使用した。日本時間との差は9時間。

11) 1945年1月25日付『朝日新聞』は、この邀撃作戦を「(B-29の-筆者) 日本攻撃開始以来もっとも熾烈なる日本空軍の邀撃」と報じた。

日誌は、この日の様子を「二編隊になり約十分の間かくを置いて十五機と十四機で潮岬から侵入し、坂神めざしてやって来た。その内一支隊が琵琶湖に出て東進、名古屋を襲ふらしい状態に。」そして「三時頃、二度目の敵三編隊が潮岬から侵入して来た。これも坂神地方を侵して名古屋をめざしてやってくる。」と記している。偶然かもしれないが、この日、先ず第1目標に向かったのは米軍資料でも第73爆撃航空団の499爆撃群団15機、第500爆撃群団14機の29機であった。このうち500爆撃軍団の1機が爆弾を投下することができず、記述のように第1目標を爆撃したのは28機であった。情報源は日本軍のラジオ放送と考えられるが、興味深い一致と言えよう。

また日誌は、雲で見えなかったが「上空では機関砲の音がしきりと聞へる。友軍機の邀撃に相違ない。」と記し、軍情報として「撃墜十三機、撃破五十機」を掲げているが、米軍資料は、B-29の射撃手は日本機33機を撃墜、22機を確実に破壊、40機に損害を与えたとしている。

日誌によれば、夜に入って4度目の警戒警報が鳴る。これは時間的にみてWSM133と考えられる。同機は、爆撃目標である名古屋陸軍造兵廠熱田製造所に対して232114K（日本時間20時14分）に高度31500フィートから350ポンド一般目的弾20発を投下した。豊橋を通過したのはその帰途と思われる。なお、爆弾とも地震ともつかぬ「不可解な音」の正体は、翌日の日誌の記述からして高射砲のようである。

名古屋空襲を記録する会（1985）『名古屋空襲誌・資料編』は、05時20分に来襲したB-29、1機は、栄、東、千種、各区の一部に中型爆弾25を投下し、死者18人、全焼・全壊33戸（内工場2）等の被害を出したと記録している。また大規模爆撃については、14時50分から15時30分にかけてB-29約70機が来襲し、東、千種各区、中島郡稲沢町等に大型爆弾252発、大型焼夷弾204発を投下し、死者145人（内東区109人）、全

焼・全壊137戸（内工場5）となっている。さらに20時18分来襲のB-29、1機は、海部郡飛鳥村に大型焼夷弾23発を投下したとしている。

一月二十四日（水）

(63) 午前〇時二十分、熟睡中を警報のサイレンに起される。執拗な敵はまたまた志摩半島の沖を名古屋めざしてやつてくるといふ。風もない静かな夜半、外に出て見張つてみると天を蔽ふ薄雲は中天の月をかくし、朧夜のやうだ。情報で松坂を通つた、名古屋に来た、といふので、そろそろこちらへも来るなど待ち構えて居ると、西北に当つてまたまた物すごい音がする。ひるま以来疑問の音はどうも高射砲をうつ音らしい。いよいよ来たなど婆さんを起し待避させ、自分はその傍らに立つて見張つてゐる。どうも頭の上へくるらしいので尋いで壕に入つた。ほんの一分間、もう真上としても去つた頃に出て見ると、少し北寄りを東へ行けらしい。まもなく情報で敵は浜名湖附近より南方洋上に脱去したことを伝へ、一時二十分、警戒警報解除。焚火に暖をとりながら熱いお茶一杯のんで寝る。

侵入一機 伊勢湾より名古屋を経て 浜松方面より脱去 投弾あり

(64) 午前四時、まだ明けやらぬ夜の大そらをゆさぶつてまた警戒のサイレンが鳴る。またかとはね起き戸外に出ると、月はとくに落ちて辺りは真暗だ。満天の星を仰いで情報を聞いて居ると敵一機が潮岬まで来てそこで方向をかへ、志摩半島をめづつて名古屋にやつて来た。そらこそと待ち構へると敵め反対に西に向ひ琵琶湖まで行つたが、また思ひかへして名古屋にやつて来た。今度こそは緊張してゐると、西の方で前の地震のときのやうな四辺りが明るい程の光りがする。遠くで高射砲をうつ音が遠かに聞へる。かくて聞へてきたのが例の特徴ある爆音。もうあたりで待避の鐘がやかましく鳴る。針路がはつきりしないので婆さんを壕に入れ、耳をそばだてて居ると忽ち西北に当つて恐ろしい爆音。敵め行がけの駄賃に投弾したに違ひない（後に国府町森¹²⁾

12) 現在の豊川市森付近をさすと思われる。

第11表：1月23～26日の気象観測爆撃作戦

月日	作戦	出撃時間 (K時)	出撃時間 (日本時)	到着予想時 間(日本時)	目標(地域)
1月23日	WSM134	231813K	231713	240013	名古屋
	WSM135	232110K	232010	240510	名古屋
1月24日	WSM136	241313K	241213	241913	大阪瓦斯会社
	WSM137	241800K	241700	250000	大阪瓦斯会社
	WSM138	242207K	242107	250400	大阪瓦斯会社
1月25日	WSM139	251402K	251302	252002	名古屋
	WSM140	251912K	251812	260112	名古屋
	WSM141	252143K	252043	260343	名古屋
1月26日	WSM142	261510K	261410	262110	東京

出所：第9表に同じ。

ときいた)。少々慌てて壕に入った。

ほんの一分間。もう通過した頃を出て見ると、何処にも異状はないらしい。敵は南よりも東南に向つて逃げてゆく。かくて敵は浜名湖西方から南方洋上に脱去し、五時になつて警報は解除された。

敵めが投弾したのは音響で判断すると五六発らしく、場所は硝子戸がガタついた点から見て、近ければ大村附近、遠くても牛久保、篠東¹³⁾ 辺を出まいと思ふ。それにしても名古屋から琵琶湖の方まで持ち廻り、落す場所がなくて、この近くで棄てていつたなど、いまいましい限りだが、然し大事な処へ落されたよりはまだましだと思はれる。

侵入一機 伊勢湾より名古屋を襲ひ 浜名湖方面より脱去 [爆弾投下]

(65) 夕方から降り出した雪は、漸く積つて一面の銀世界となり寒い晩だ。もうそろそろ寝やうとした午後八時、またそろ警戒の警報が鳴り出した。出て見ると、折柄、月は中天にあり雪はまだまだ盛んに降つて居る。その中に立つて情報を聞いてみると、敵は一二機で志摩半島附近から侵入し津の辺から伊勢湾を横切つて渥美半島へやつて来た。遠く近く待避の鐘が鳴り出した。然し爆音一つ聞へるでなし。これは少し慌てすぎだろう。この敵は、其後名古屋を

経て大坂に侵入し、若干投弾してから紀伊半島を熊野灘に出、南方へ脱去したといふ。午後九時、警報は解除。緊張をとくと急に寒を覚へて来たので屋内に入り焚火に暖をとりながらこれを誌し終つて寝につく。

侵入一機 大坂に投弾 脱去

[解説] 第11表に1月23～26日の米軍気象観測爆撃作戦の概要をまとめた。気象観測爆撃作戦については、WSM130～WSM141の間にWSM136～138を除いて、9回にわたつて名古屋地域が選ばれた。23日には名古屋に対する大規模爆撃も行われた。

日誌によれば、1月24日、1回目の警戒警報は00時20分であった。これはWSM134であり、04時の警戒警報はWSM135である。いずれも名古屋を目標にやって来た各B-29、1機である。WSM135について「西北に当つて恐ろしい爆音」があり、「(後に国府町森ときいた)」としている。

米軍資料によれば、名古屋地域は雲に覆われており、WSM134は240150K(日本時間00時50分)に高度30000フィートからレーダーで250ポンド一般目的弾20発を名古屋に投下した。また

13) 大村は現在の豊橋市大村町、牛久保、篠東は当時から豊川市。

WSM135は、名古屋地域の爆撃に失敗し、240551K（日本時間04時51分）に高度30000フィートからレーダーで250ポンド一般目的弾20発を三谷（Miya北緯34度49分－東経137度15分。この座標は、現在の三河三谷駅の北にあたる）に投下したことになる。

名古屋空襲を記録する会（1985）によれば、24日00時42分に、B-29、1機が愛知県天白村に250Kg爆弾8発を投下、このため死者5名、全壊2戸の被害を出した。また、04時40分にB-29、1機が宝飯郡御津町豊沢に、大型黄燐焼夷弾14発を投下したとの記録がある。しかし、御津町（1990）には2日連続の被弾の記録はない。米軍資料のいう三谷町についても、蒲郡市（2006）『蒲郡市史（本文編3）』には記載がない¹⁴⁾。

24日には、「午後八時、またぞろ警戒の警報が鳴り出した」。日誌は「大坂に侵入し、若干投弾し」と記している。この時、来襲したのはWSM136に相当すると考えられる。このB-29は志摩半島を北上して大阪に向かった。米軍資料は、1月24日の速報ではWSM136～138の目的地を名古屋としているが、実際は大阪瓦斯会社を攻撃目標とし、レーダーで250ポンド一般目的弾20発を投下したが、爆撃手のミスで大阪市内には投弾できなかった。

一月二十五日（木）

一昨日、名古屋及坂神地方に來襲したB二九、七十数機に対する邀撃戦果は、昨夜になつて大本營から發表された。それによると撃墜十三機、撃破五十二機（内重複の疑あるもの二機）合せて六十五機で、即ち全体の九割以上、撃墜のみにも二割といふ多数に達したといふ。これまでとても半数以上の撃墜破を出したことは一再に止まらぬが、來襲機の殆んどを撃墜破したやうな戦果は、敵味方何れにしても全く脅威的なもので、敵側の報道によるとこの日邀撃に出動した日本機は百機以上だつたとい

ふ。

一方比島戦線は、強行な敵のルソン島上陸作戦により已に十余日に亘り激化の一路を辿り、リングエン湾に蟄集する敵艦隊は二百隻以上にも達するの、これを撃破するには飛行隊が不足で前線の將士を歯噛みさせて居る。その中から百機をも内地防禦に充てたとすれば、前線の前途を思ふとき、いかほどの戦果があつても決して有頂天になる訳にはゆかぬ。今後の大勢を決する比島戦線が内地の犠牲に於て幾分でも有利に展開されるなら、銃後はどんな犠牲をも喜んで受けやう。勿論これは軍の統帥に属する問題で我々の口にすべき所ではないが、国民誰しもがこの心持ちにvariあるまいと考へる。

一月廿五日（木）

(66) 夜の大ぞらをゆさぶつて鳴り渡るサイレンに眼をさまし、時計を見るにまだ宵の口の午後九時半だった。戸外に出ると、中天の月は所どころに消え残る残雪に映じて真ひるのやうな明るさだ。その雪の上をすべるやうに吹てくる寒い寒い風に曝されながら情報を聞いてみると、琵琶湖の南方から敵一機が名古屋をめざしてやつてくるといふ。次いで名古屋へ投弾して静岡県に向ふらしいといふ。ソラこそと西の方を警戒してみると、遙かの彼方からすさまじい高射砲の音が続いて二度許り聞へる。或は三度だったかも知れぬ。ついそこの慌てものが待避の鐘をうち出した。待てども待てどもお馴染の爆音が聞へない。暫くすると敵は浜松市の西を南進中との情報。こちらには御無沙汰して遙か北方を通過したものと見へる。かくて十時になると警報は解除。僅か三十分のことでも体はすっかり冷へ切つた。

侵入一機 名古屋に投弾 脱去

[解説] 日誌は、大本營から發表された23日の米軍による名古屋三菱重工発動機製作所への大規模爆撃の際の日本側戦果について改めて記述している。その発表によれば「この日邀撃に出動した日本機は百機以上」で、その戦果は「全体

14) 1945年1月25日付『朝日新聞』は「二十四日四時三十分頃伊勢湾を北上、名古屋に侵入、爆弾投下ののち四時五十分浜名湖附近より脱去」としているだけである。

の九割以上、撃墜のみにても二割といふ・・・驚異的なもの」であった。米軍側の損害については記述の通りであるので繰り返さないが、日誌の著者は、このような情報にまだ疑いを抱いていないように思われる。ただ一方で、フィリピン戦線では1月9日からリングエン湾に米軍の上陸作戦が開始され、同湾に「蝟集する敵艦隊は二百隻以上にも達するのに、これを撃破するには飛行隊が不足」しており、「今後の大勢を決する比島戦線」の状況に少なからぬ不安を感じているように見える。

25日のB-29の来襲は、「宵の口の午後九時半だった」。これは、名古屋の愛知時計電機工場等を目標にやって来たWSM139であろう。大阪瓦斯会社を攻撃目標としたWSM137は、侵入路・離脱路ともに豊橋地域上空を通過しなかったようであり、同じくWSM138はエンジン故障のため早期帰還して、いずれも豊橋地域で警戒警報は発令されなかった。WSM139は、名古屋の愛知時計電機工場、日本碍子分工場に対して25700フィートから目視で500ポンド一般目的弾10発を投下、大規模火災を観測した。

名古屋空襲を記録する会(1985)は、25日21時40分に来襲したB-29、1機が大型爆弾7発を瑞穂区及び南区に投下、死者3人、全壊家屋17戸等と記している。

一月二十六日(金)

空襲時に於ける軍情報の放送は、一般民衆にとつて非常に心強い感を得へる。お蔭で中部日本一帯に於ける敵機の動静が手にとるやうに分る。その情報を基礎に自分らの上空に眼と耳を働かせばよい。従て特別な任務がない限り、いよいよ敵が接近するまでは寝ていてもよい訳だ。ただ、少し情報は遅れ勝であるといふことを心得へて居ればよい。

これはラジオのある家でのこと。それのない自分の所では前のが頼りだ。その上こんな程度でも記録してゆくためには、可成初めからの情報を聞いて置きたい。そのために昼だろうが夜の夜中だろうが、警報が発令される度毎に戸外に立つて敵の動静を見張りながら、情報を聞くことにして居る。愈々敵が近づ

けば近所へも注意を伝える。一昨夜などふりしきる雪中に立つてこれをやつたら雪達磨のやうになった。解除になると焚火に暖をとりながら、見たまま思つたままを書きとめる。どんな夜中でもこれを終わらねば寝たことはない。人から見れば物数寄とも見へやうが、これには色々の利益がある。先づ敵の動静が分ること、敵接近の場合、適當の閑暇をとるに適當な時間が得られること、近所の女子供ばかりの家庭に幾らか安心を与へることが出来る。更に、この記録の材料が得られる上に、寒さに極端に弱かつた自分が馴れて未だに風ひとつ引かないで居る。こう考へると中々止められない。所詮、体のつづく限り人が何といふが続けてゆきたいと思つて居る。

一月二十六日(金)

(67) 夕餉をすまして一服してみると、午後六時を少し過ぎた頃、警戒警報のサイレンが鳴り出した。今度は自分が防衛当番なので早速組内へ伝達し、自宅前の道路に立つて見張つてみると、満月に近い月の晃々たる月が東天にかかり昼をも欺く明るさだ。情報によると、敵味方不明の機が伊勢湾から渥美半島の上空にありといひ、次いで渥美湾を旋回中と伝へ、暫くすると浜松市の東方で敵機らしい爆音を聞いたといふが、実は敵とも味方とも依然として不明で、見張つていても張合のないこと夥しい。その内に西から雪雲が拡がつて来てあたり月を隠して仕舞つた。こうして耳を大空に傾け立つこと凡そ一時間、遂に不明のまま警報は解除となった。

来襲疑問

[解説] この日、日誌の著者は、その情報源について記述している。「空襲時に於ける軍情報の放送」を「基礎に自分らの上空に眼と耳を働かせばよい」としている。しかし、著者の家にはラジオが無かったようで、「それのない自分の所では前のが(前の家のラジオがという意味であろうか?)頼りだ」としている。その結果、警戒警報発令とともに「昼だろうが夜の夜中だろうが、警報が発令される度毎に戸外に立つて敵の動静を見張りながら、情報を聞くこと」に

し、「解除になると焚火に暖をとりながら、見たまま思つたままを書きとめる」ことが日課となった。「どんな夜中でもこれを終わらねば寝たことはない」と記しているの、三日分、一週間分を後からまとめて記述しているのではないことが分かる。

26日には「午後六時を少し過ぎた頃、警戒警報のサイレンが鳴り出した」。しかし、これは敵味方不明のまま1時間ご警報解除となった。日誌は最後に「来襲疑問」と記している。米軍資料によれば、名古屋地域を目標とするWSM140及びWSM141のうちWSM140は第4ターボに火災が発生し離陸後3時間で早期帰還、WSM141は名古屋の爆撃に失敗して、雲に覆われたなか推測航法で新宮市に500ポンド一般目的弾12発を投下した。「敵味方不明機」の来襲は、WSM141の日本への到着予測時間とも時間的に離れており、関係がないと考えられる。友軍機であろう。ただ、豊西村(1944～45)にも18時34分警戒警報発令、19時13分同解除の記録がある。

26日には東京地域を目標とするWSM142が21時台に来襲することになっているが、日誌には記述がない。豊西村(1944～45)には21時37分警戒警報発令、22時20分同解除の焔記録があり「伊豆北方ニ投弾アリ」としている。原田良次(1973)は、「二一四〇よりB-29一機八丈島-駿河湾-静岡-甲府-大月をへて東京に侵入・・・出動せず」(144頁)と記している。

一月廿七日(土)

(68) 夜半十二時に近く用便に起きた寝入端を又々警戒警報のサイレンに起される。時計を見れば〇時三十分だ。

戸外に出て見ると、空一面に雲はあるが月の光で逆も明るい。その上風もなく静かな夜だ。情報で何処から侵入したのか聞き洩らしたが、敵は富士山の北を山梨県に入り、尚東進中にて僅か二十分足らずであつけなく解除になつた。何れ帝都方面へ向ふに違いない。いまましいことだ。

侵入一機 御前崎より帝都に向ふ

(69) 前に撃墜二割、撃破七割といふ痛手を受けながら、四日目の今日またまた大挙してマリアナから押しよせて来た。

正午を過ぎる十分、また食事中突如サイレンが鳴り初めた。箸を置いて立上り、戸外に出て情報をきくと、紀伊半島めざしてやつて来た敵は合せて三編隊。こやつら途中方向を換へ、坂神に向はず志摩半島を巡つて名古屋にくるらしい情勢に、〇時半、空襲警報の発令となつたのだ。

この敵に続き約三十分後れて、海上を北上する一編隊もありとの情報に緊張して待機すると、浜松から出撃する味方戦闘機が二十二機、翼を揃へてかけつけてゆく。どうか無事であるやうにと祈りつつ見送つた。〇時三十八分、敵の先登はもう渥美半島の上空に到達し北進中だといふが、相憎今日は空一面の雪雲で皆目敵機の所在が分らない。爆音は徒らに雲に反射してあちらにも聞へこちらにも聞へ、はては天一面に敵機が居るやうにさへ思はれる。丁度一時、蒲郡附近から侵入した敵二機が市の北寄りを通つて東に向ふのが雲の切れまから見え、慌だしく待避の鐘が鳴る。然し危険を感じずるやうな位置ではない。一時二十分、東から真上に迫る純白の二機。敵機かと思ればそれは友軍機だ。

その頃から雲が漸く切れはじめ、頭上一杯に青空が現れて来た。いつの間にか敵は名古屋を襲つて後東進し、悉く東部管内へ去つたといふ。先刻雲の中に轟き亘つた爆音がそれだつたのだらう。危いことだった。暫くすると、また純白の一機が東から頭上を横切つて西に向つてゆく。ふと東を見ると、敵の十一機がゴチャゴチャになつて西北へ進んでゆく。その内の一機が列を離れたと見ると、真上をさしてやつてくる。又しても待避の鐘がなる。然し投弾した模様もなく、真上で旋回し東に向つた。あとの十機も岡崎と名古屋の間で反転し静岡県へ侵入したといふ。一時五十分蒲原附近を敵十六機が東進中といふのは、此奴らのことだらう。その頃、海上にあつた敵編隊も御前崎附近から侵入し東に向つたさうだ。何れ帝都をめざすだらうが、どうか大した損害なく済したいものだ。帝都には身寄りのものも居れば知己も少くない。それらの人達の(身)上が気遣はれてならぬ。二時になるともう中部管内に敵影な

第12表: 1月26~28日の米軍気象観測爆撃及び写真偵察任務

月日	作戦	出撃時間 (K時)	出撃時間 (日本時)	到着予想時 間(日本時)	目標(地域)
1月26日	WSM143	261808K	261708	270008	東京
	WSM144	262015K	261915	270215	東京
1月27日	3PR5M21	270308K	270208	270908	名古屋
	WSM145	270505K	270405	271105	名古屋・東京
	WSM146	270506K	270406	271106	名古屋・東京
	Major Strike- Mission No.24	262055Z~	270555~	271255~	中島飛行機武蔵製作所
	WSM147	271701K	271601	272301	名古屋・東京
1月28日	3PR5M23	280259K	280159	280850	呉(早期帰還)
	3PR5M22	280307K	280207	280907	東京
	3PR5M24	280313K	280213	280913	呉
	3PR5M26	280322K	280222	280922	神戸・大阪
	WSM148	281446K	281346	282046	東京

出所: 第9表に同じ。3PR5M25及び3PR5M27は作戦中止。

く、二時十分空襲警報は解除となった。帝都はこれからが大変だらう。

来襲七十機 数編隊 撃墜二十二機 他の大半撃破 嗚呼自爆未帰還十二機

[解説] 27日の00時30分に警戒警報が発令された。「敵は富士山の北を山梨県に入り、・・・帝都方面に」向かい、同警報は20分程で解除された。これは東京を目標とするWSM143と考えられる(第12表参照)。その後、WSM144が東京を目標に、3PR5M21が名古屋を目標に来襲しているが、日誌にはその記述がない。WSM144についてはコースが東寄りで警戒警報が発令されなかったか、睡眠が深く警報に目覚めなかった可能性が考えられる¹⁵⁾。また、写真偵察機については後述の焼夷弾処理訓練に外出したため、日誌への記述を忘れた可能性がある。豊西村(1944~45)は、27日については00時16分警戒

警報発令、00時45分同解除、「富士山西方ヨリ甲府ニ侵入」、02時05分警戒警報発令、02時37分同解除、「富士山南方ヨリ東部地区へ侵入」、09時28分警戒警報発令、10時16分同解除、「浜松東方ヨリ海上ニ脱虚セリ」の記録がある。それぞれWSM143、WSM144、3PR5M21と見て間違いないだろう。

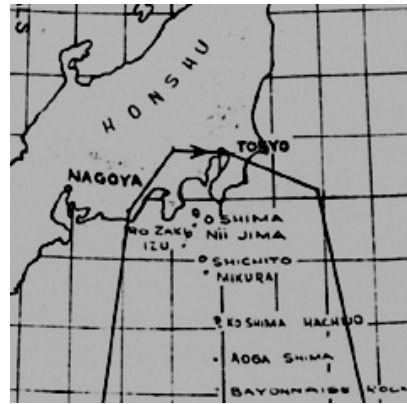
日誌によれば、この日12時10分に再び警戒警報が発令された。そして、紀伊半島を目指して3編隊が北上中とのラジオ放送があり、名古屋侵攻の恐れもあり12時30分には空襲警報が発令された。そして、この日の日誌は「丁度一時、蒲郡附近から侵入した敵二機が市の北寄りを通つて東に向ふ」、「ふと東を見ると、敵の十一機がゴチャゴチャになつて西北へ進んでゆく」、「あとの十機も岡崎と名古屋の間で反転し静岡県へ侵入したといふ」、「海上にあつた敵編隊も御前崎附近から侵入し東に向つたさうだ」等と

15) 1945年1月28日付『朝日新聞』は、「二十七日午前零時半頃一機が御前崎附近から甲府を経て帝都に侵入投弾のち脱去、・・・同午前二次半ごろ二機で御前崎から千葉に侵入投弾のち脱去したが我高射砲の猛撃にその一機は有効弾を蒙つた模様である」と報じた。それぞれWSM143とWSM144と考えられる。ただ後者について2機としている。

混乱した記述が続く。結局は、B-29の各編隊は、名古屋ではなく東京地域を目指したようである。

米軍資料によれば、27日に大規模爆撃が計画され、日本時間の同日早朝（262055Z～262145Z、日本時間27日05時55分～06時45分）、サイパンのアイズリー空港を74機のB-29が出撃した。攻撃目標は、東京の中島飛行機武蔵製作所または名古屋の三菱重工発動機製作所のいずれかというものであった。東京地域か名古屋地域のどちらを爆撃するかを決めるため、2機の偵察兼気象観測機を出撃させた。これは、いずれも名古屋・東京地域を目標とするWSM145とWSM146と考えられる。両機はほぼ同時刻にアイズリー空港を離陸している。その飛行ルートは尾鷲付近から上陸、北上して琵琶湖で右旋回して名古屋上空を東へ進み、東京上空付近を経て房総半島へ抜けるものであった。この気象観測の結果、東京地域を攻撃することが決定された。なお、WSM145は爆弾を投下せず、WSM146は、場所は不明であるが500ポンド一般目的弾10発を投下した¹⁶⁾。日本側の航空機の反撃や対空砲火はなかった。

日誌には、この2機と思われる記述はない。それは、豊西村（1944～45）についても同様で、12時8分に警戒警報、12時27分に空襲警報がそれぞれ発令されている。大規模爆撃部隊の来襲の情報に翻弄されて2機の気象観測機の来襲については警報が発令されなかったのであろうか。原田良次（1973）『日本大空襲（上）』（中公新書）は、1月27日早朝、日本軍は「マリアナ諸島基地でB29群が発信直前に行っている活発なラジオ・チェックをキャッチし、これを敵編隊本格来襲と判断し、その邀撃態勢を整えた」。そして「敵二機先発機侵入のころより、雲低く、高射砲迎撃音しきりなり」（147頁）と



第26図：1月27日の飛行ルート

記している。

東京地域の第1目標は中島飛行機武蔵製作所、第2目標は港湾地域および市街地であった。主力部隊は東京地域の爆撃を指示された場合には、浜名湖北岸（実際は御前崎付近－第26図参照）に上陸して甲府をめざし、ここをIPとして第1目標を爆撃、爆撃後は房総半島の銚子の南から太平洋上へ抜けることになっていた。上陸地点を浜名湖北岸としたのは東京と名古屋のいずれに決定しても対応しやすい場所であったからであろう。

結果として、第1目標には投弾できなかった。出撃した74機のうち56機が第2目標を爆撃、3機が最終目標、3機が臨機目標をそれぞれ爆撃した。12機は無効機であった。第2目標に対して655発、163.75トンが投下され、効果は良好と評価された。また、最終目標として浜松等が爆撃された¹⁷⁾。

日本の戦闘機の攻撃は、第十飛行師団の全力をもってなされたもので¹⁸⁾、従来にないほど激しいものであった。日本機の数には275機、攻撃回数は984回にも及んだ。この結果、米軍資料によれば、B-29、8機が失われ、32機が損害

16) 27日に名古屋が被爆したという記録はない。

17) 浜松は最終目標として2機の攻撃を受けたことになっているが、浜松市および郡部の空襲もふくめて浜松市には空襲の記録がない。ただ、『豊西村空襲記録』は「浜松東方ニ投弾セリ、飯田村トノコトナリ」と記しており、これが飯田村でない可能性も高いが、周辺に爆撃があったことは事実のようである。

18) 原田良次（1973）147頁。

を受けた。また、米軍が撃墜した日本機は60機、高い確率で撃墜17機等であった。

ハンセルが指揮をとった時期においても航空機工場だけでなく市街地を目標にした無差別爆撃が行なわれ、しかも殺傷力の強い破碎集束弾などが使用されていたことがわかっている。1月23日と1月27日の爆撃は、ルメイに交替したことによる大きな変化はまだ認められない。27日の場合は、偵察兼気象観測のために事前に2機が派遣され、天候の都合で東京地域か名古屋地域のいずれかを爆撃するというそれまでにない作戦をとった。

日誌によれば、豊橋地域の空襲警報は14時10分に解除となった。米軍資料ではWSM147が27日11時頃に名古屋・東京に侵入していることになっているが、日誌は、28日になって当地方には関係ないがとして「伊豆から帝都へ」侵入したことを簡単に触れている。名古屋へは向かわず直接、東京に向かったのであろう。原田良次(1973)も「夜二三四三 B29一機相模湾より川崎をへて東京へ侵入」(147頁)としている。

一月二十七日(土)

- 一 記事は前後したが、けふ午前十時から向山の作業場で六封度脂油焼夷弾の処理実験をするから隣保班長以上は見学に来いとお達し。組では組長不在なのでその代理にいつて来た。その模様はこうだ。
- 一 先づ敵めが落す複合爆弾を見る。これは六封度の焼夷弾を三十八筒抱き合せ高さが四尺位、太さが直径で一尺余り。何でも四十貫近くあるといふ。これが投下されると空中で分解し各個の導火線に点火せられバラバラと落ちてくる。
- 一 そのバラバラに落ちてくるやつは、野砲の薬莖位の太さで長さが五十センチ。底の方に火薬があり、それから寒冷紗^{かんれいしや}¹⁹⁾の袋に入れた水飴みたいなものが詰つて居る。この水飴のやうなものは、ゴムをキハツとベンゼンで溶いたもので、これが火となつてそこら当りに飛び散るの

だ。尚、筒には落下のとき垂直を保つやうに三尺許りの青い布が四筋ついて居る。

- 一 いよいよ実験に移り、先づ水平にして導火線に点火する。約一分間位ひで爆発すると、大きな火の固りが五六間前方へ飛び出して盛んに燃へ出し、外に小さな火が十許りバラバラと附近に落ちる。この大きな方は、火焰こそ猛烈だが熱度は六百度位といふからほんの焚火の程度。濡蓆二枚かけるとあつてなく消て仕舞つた。小さい方は足で踏み消せる程度のもの。暫くすると大きな方がまた燃へだした。今度はバケツ一杯の水で完全に消えて仕舞ふ。
- 一 次ので垂直にして置いて点火した処、その大きな火玉は凡そ三四十間も打ち揚げられて落ちて来た。これも濡蓆をかけるとあつさり消へ、小さいのは兵隊が靴で踏み消した。
- 一 今度は弾を斜めに装置し、前方に板戸を並べそれに向つて点火した。爆発と共に火がその板戸に飛んで一面の火となつた。盛んに燃へてゐるのを三四十間離れてゐた警防団の人が水を運んで一杯掛けるとさつと消へて仕舞い板は焦げてもゐない。つまり脂油が板に喰付て燃えるだけで板は何ともない。その火が板に燃へつくには数分かかるといふからこれは心得へて置くべきことだらう。
- 一 その次に同様にして垂れ下げた菰に向けて点火した。今度は菰が一面火となつたのを注水で訳なく消した。ただ中心が二尺四方許り燃へたのみで他に異状はなかつた。
- 一 以上、四回の実験でこの脂油焼夷弾は濡蓆と水さへあれば完全に消し止められることが判つた。ただ、火叩きは火を散乱させるので小さな火を処分するにはよいが大きい方には使はないことだ。
- 一 この外焼夷弾にはエレクトロンもあれば黄燐のもあつてそれぞれ消し方が違ふが、このゴム焼夷弾は全くあつけないもので、導火線がもえてゐる内なら何でもなく、爆発してからだとその大きな方を先づ処理し、小さな方などは踏み消

19) 綿や麻糸で荒く平織りに織った布のこと。英語では cheesecloth ともいう。

せばよい。激しさうには見えても大したものではないから、火の勢ひに惑はされず勇敢に突進すれば何でもない。尚これも早期処理が大切で導火線が燃えてゐる一分間が尤も処理し易い時機だといふことを念頭に置くべきであらう。

- 一 これだけ見てこの脂油焼夷弾処理に確信を得て散会。帰宅し昼食をとりつつあつた際警報が発令されたのだ。

[解説] 1937年4月、国民の防空義務を定めた防空法が成立した。同法は、1941年11月と1943年10月に改正され、1941年の改正では、新たに「主務大臣ハ・・・一定区域内ニ居住スル者ニ対シ期間ヲ限り其ノ区域ヨリノ退去ヲ禁止又ハ制限スルコトヲ得」（第八条ノ三）、「空襲ニ因リ建築物ニ火災ノ危険ヲ生ジタルトキハ・・・之ガ応急防火ヲ為スベシ」（第八条ノ五）等の条文が追加された。この条文は、水島朝穂・大前治（2014）『検証 防空法』（法律文化社）が詳しく述べているように、その運用基準と合わせて読めば、①都市からの退去禁止、②空襲時の応急消火義務を意味していた。そして、同法第十九条では違反者への罰則を規定していた。八条ノ三の違反に対しては「六ヶ月以下の懲役又ハ五百円以下の罰金」、八条ノ五の違反に対しては「五百円以下の罰金」であった。

水島・大前（2014）によれば、退去を禁止した理由は、一つは応急消火義務を履行させるため、そして何よりも戦争継続意思の破綻を回避させるためであった。このような禁止規定や義務規定の追加を背景に焼夷弾への対処の仕方や後述するような防空壕に対する考え方等も変化していった。最終的に、「とにかく焼夷弾なんかは絶対に怖くないものであるということ」を認識させるという政府・軍部の宣伝が続けられた。

日誌では1月27日10時に向山で「六封度脂油焼夷弾の処理実験」が行われた様子が紹介されている。この記述で興味深いのは、どのように手に入れたかの不明であるが、米軍が実際に使用していると思われる6ポンド焼夷弾を

使って実験を行っていること、そしてこの6ポンド焼夷弾を38発まとめた収束弾を複合爆弾と呼んでいることである。

この処理実験では、6ポンド焼夷弾を水平、垂直、斜めに装置して点火、斜めにした際には戸板や藪に向けて油脂を発射させている。いずれも濡れ蓆と水で容易に消火できたとしており、焼夷弾火災は「たいしたものではない」という安心感をあえて与えている節がある。そして結論として「激しさうには見えても大したものではないから、火の勢ひに惑はされず勇敢に突進すれば何でもない。尚これも早期処理が大切で導火線が燃えてゐる一分間が尤も処理し易い時機だといふことを念頭に置くべきであらう」と記している。

しかし、例えば、M69と呼ばれる油脂焼夷弾は、通常38発を収束してE-46収束焼夷弾等として投下された。M69は、木造家屋が密集する日本向けに開発された焼夷弾でもあった。地上約750mでE-46の収束バンドが解除され、38発のM69がバラバラと地上に降り注ぐ。地面に対して垂直に落下させ、速度を抑えるために、焼夷弾の尾部にはリボンが付けられていた。これにより落下する焼夷弾が屋根を貫通して、床に突き刺さるとともに充填された油脂に火が付いて周囲に飛び散るように設計されていた。

B-29、1機が約20000ポンドの爆弾を搭載することにすると、E-46収束焼夷弾は1個約500ポンドであるから40発搭載できる計算になる。これをM-69に換算すると1機当たり1520発で、それらが複数のB-29から降り注いでくることになる。上記の処理実験は、無数の焼夷弾が空から降り注いでくるという状況を全く無視している。ついでに言えば、多くの焼夷空襲では、M-47A2等、人員殺傷力が強く消火活動を困難にするための焼夷弾がE-46と共に投下された。

こうした状況を無視した日本の民間防空対応の結果、空襲激化後も多くの住民が都市部に残り、人的被害を大きくしていったのである。

一月廿八日 (日)

(70) 昨日夕方から少し風邪気で今日一日寝たり起きたり。夕食を早く済してまた寝た。一睡して用便に起きたとたん警戒警報のサイレンが鳴り出した。ゆうべ一夜敵の侵入もなかつたので、今夜当り来るなどと思つたら果してその通り。時計は午後の九時四十分。外に出て見ると、折柄満月で昼のやうな明るさ。晩方砕いて置いた水槽にもう厚い氷が張りつめて居る。聞けば、御前岬附近から敵二機が侵入したので警報の発令となつたのだが、敵はそれより針路を東に転じ、間もなく富士山西方から東部軍管内に行つたとて、僅か二十分許りで警報は解除された。

尚、この地方に関係はないが廿七日夜十一時ごろ伊豆から帝都に、今朝十時ころ東京湾から帝都に、十時半ころ四国から坂神に、また紀伊半島から琵琶湖を経て東進関東北部より水戸を経て脱去した敵機があつたといふ。

発表なし 不詳

[解説] 米軍資料によれば、1月28日にはWSM148, 3PR5M22, 3PR5M24, 3PR5M26の来襲が予想される。日誌によれば、「今朝十時ころ東京湾から帝都に、十時半ころ四国から坂神に、また紀伊半島から琵琶湖を経て東進関東北部より水戸を経て脱去した敵機があつたといふ」。これらは時間が多少ずれるが、3PR5M22, 24, 26であると考えられる。3PR5M22は27日の爆撃成果の偵察であり、その他の写真偵察機も目標が西日本のため豊橋地域上空を通過しなかつたと思われる。

日誌によれば22時40分に警戒警報が発令されているが、これはWSM148であろう。豊西村(1944~45)は警戒警報発令21時23分、同解除21時58分、「富士川上流ヨリ東部軍区侵入」と記している。なお、原田良次(1973)は、「二二〇〇単機八丈島より御前崎をすぎ、富士山より八王子、東京へと侵入」(149頁)としている。

一月廿九日 (月)

今朝の新聞に二十七日の邀撃戦の様を次の如く報

じて居る。

これまで縷々名古屋を中心に東海地区に侵入してゐた敵は、この日も陽動的に中部地区に航路をとつて本土に侵入、途中方向をかへて関東地区を指向し帝都に侵入したのである。この敵に対し新鋭機を揃へた我が制空部隊は、浜名湖、富士山、帝都上空と三段構への邀撃戦によつて敵編隊をうち崩し、更に千葉、茨城両県上空から猛烈な追撃戦を展開し、壮烈な体当たり攻撃を加へ、地上の砲火また轟然火を吐いて撃墜実に二十二機、しかも他の大半を撃破するの赫々たる戦果を挙げて、敵に壊滅的打撃を与へた。我が追撃の手は更に海上遠く伸び、敵は全く算を乱して洋上に姿を消したのであつた。この邀撃並に追撃戦の如何に熾烈であつたかは我尊い自爆未帰還十二機を数えたことでも首肯される。以上。

一月二十九日 (月)

(71) 毎夜一度や二度は起される。このごろでは用事のない限り誰も彼も寝るに早い。それには灯火管制の嚴重なせいもあらう。

今夜も恒例によつて午後八時二十分、また警戒警報が鳴り出したのを夢うつつの裡に聞いてはね起きた。初めの情報を聞き洩したので敵の行動は詳でないが、其後鳥羽沖に出て熊野灘を南方に遁走中だとしてあつさり警報は解除。其間僅かに二十分。

何でも敵め遙々遠方からやつて来ながら、我が本土の一端にふれたのみで引返していつたらしい。勿論投弾した模様もないといふ。折柄月はあれど空一面の薄曇り。これで寒ささへなければ、朧月夜とでもいい位い静かな夜だった。

侵入一機 大阪市内へ投弾 脱去

中には進んで作つた人もあるが、多くは上司より強制されいやいやながら作つた待避壕。それも実際に空襲に会つて見ると安心が得られず、近頃またポツポツ作り直す人が出来て来た。

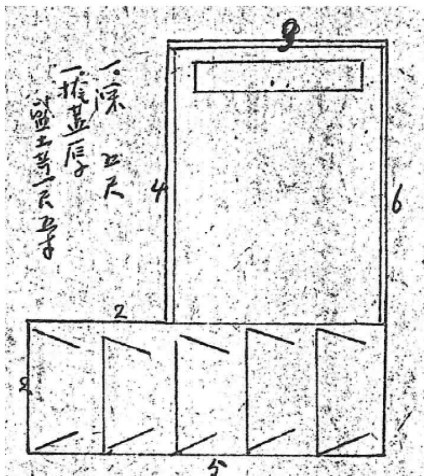
自分は一昨春秋率先して作つたが、意に満たず二度三度と改修。その間、掩蓋の墜落などがあつて地穹式に。やや満足のものが出来た。然し、実際に当ると二人ではどうにも狭い。それに軒下に近いので危険の恐れがないでもない、西の畑に掘り直す案を

立てて見た。

上図が即ちその設計図で、掩蓋には塀を除去しその柱を並べる計画だが、何分自分一人のこととて力はなし、寒くはあり、未だに躊躇して居る。大寒でも明けたらポツポツ着手しやうと思ふ。勿論早にこしたことはないが、力及ばねば是非もない。一・三〇記

(一、深 五尺 一、掩蓋 厚 盛土共一尺五寸)

[解説] 日誌は、再び27日の米軍の大規模爆撃に対する日本機による邀撃の成果についての新聞記事を紹介している。既述のように、この空中



戦では70機以上の日本機が撃墜されるか、ほぼ確実に撃墜されたことについて軍部は一言も触れていない。ただ、12機がB-29への体当たり攻撃を実行して未帰還としただけであった。

29日は20時20分に警戒警報が発令されたが、20分余りで解除となった。これはWSM151と考えられる(第13表参照)。WSM149とWSM150については触れていない。東京を目標としたWSM149については、豊西村(1944~45)が00時43分警戒警報発令、01時23分解除、「御前岬ヨリ富士山西方ヲ東部軍地区ニ侵入セリ」と記録している。原田良次(1973)は、「〇〇五〇、〇三一五警報あるも八丈島付近に不明機一機ある由」(150頁)としており、2度目の警報がWSM150と思われる。米軍資料によれば、WSM149は東京の第1目標に500ポンド一般目的弾6発、500ポンド焼夷弾6発を投下した。WSM150は、実際にはレーダーで八丈島を爆撃した。また、WSM151はレーダーで大阪に500ポンド一般目的弾6発を投下したことになる。

なお、この日の日誌には、新たに西の畑に作ろうと考えている待避壕の設計図なるものが記されている。ただし、この設計図から待避壕を

第13表：1月28日～31日の米軍気象観測爆撃及び写真偵察任務

月日	作戦	出撃時間 (K時)	出撃時間 (日本時)	到着予想時 間(日本時)	目標(地域)
1月28日	WSM149	281814K	281746	290046	東京
	WSM150	282041K	281941	290241	東京
1月29日	WSM151	291338K	291238	291938	大阪
	WSM152	291848K	291748	300048	大阪
	WSM153	291955K	291855	300155	大阪
1月30日	3PR5M28	300303K	300203	300903	名古屋
	WSM154	301320K	301220	301920	大阪
	WSM155	301350K	301250	301950	大阪
	WSM156	302032K	301932	310232	大阪
1月31日	WSM157	311436K	311336	312036	大阪
	WSM158	311654K	311554	312254	名古屋

出所：第9表に同じ。

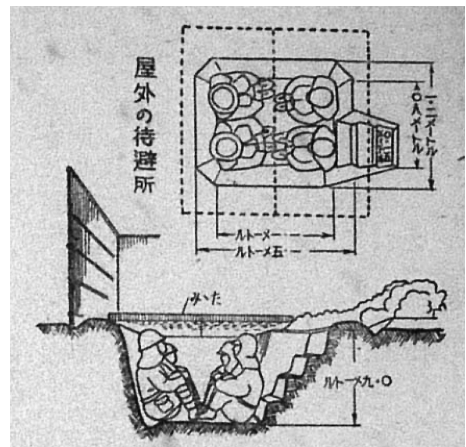
具体的にイメージしにくい。大方の人は上司に強制されて作ったとしているが、このような簡易待避壕が自己の責任において各戸に作られたとも読める。しかし、それは日記の著者に限らず「実際に空襲に会ってみると会心が得られる」ものでは到底なかったろう。

実は、政府・軍部は、1941年の防空法改正の前後から防空壕政策を大きく転換した。水島・大前(2014)が詳しく述べているように、1942年7月の「防空待避施設指導要領」(内務省防空局)は、待避施設の設置目的は「迅速な出動と消火」であると明記され、自宅内の床下等に設置する簡易な施設を求めていた。家の外に作る場合でも、応急消火の可能な場所への設置を求めていた。防空壕や退避所ではなく待避所と呼んだ理由もここにあった(132~138頁)。

また、「通牒 待避所ノ設置ニ関スル件」は「一 待避所ノ構造ハ・・・簡易ナルコトヲ旨トスルコトトシ、何人ト容易ニ構築シ得ル如ク指導スルコト 之ガ為ニハ新タニ「セメント」、木材等を使用セシムルコトヲ避ケ既存ノ施設又ハ手持チノ資材等ヲ活用セシムルコト・・・二 待避所ノ設置ハ強制ニ渉ルコトヲ絶対ニ避クルコトトシ、市民ニ其ノ安全性ヲ納得セシメ自発的ニ設置セシムル様指導スルコト」等(140頁)としていた。

こうして、資材不足のためにセメントも木材も使わない、極めて安全性の低い待避施設が多数作られることになった。この時期には、公的、私的を問わず堅固な防空壕の設置はすでに放棄されていたと考えられる。

なお、第27図は、内務省防空局(1943)『昭和十八年改訂 時局防空必携解説』(大日本防空協会)に掲載された、野外待避所の作り方の例を図で示したものである。ここに示された待避所が日記の著者が作ろうとしていたそれと同様に、あるいはそれ以上に簡易であることに驚くばかりである。同冊子では、「家庭の待避所は、・・・防空活動に備えて待機する場所」であることを前提として「木造住宅に設けるものは出易い床下の地下か屋外の地下がよい。已む



第27図：屋外待避所の作り方

を得ないときは効力は少ないが地上か床上に作る」(23~24頁)としている。

とくに、屋内(床下や床上)に作った待避所がいかに危険で非現実的であるかは、やがて国民は身をもって体験することになる。

一月三十一日(水)

(72) 一昨日夜の来襲以来、この地区に敵影をみながつたものの、他地区には頻々たる来襲があり、三十日午前一時淡路方面から、同二時半頃四国方面から、更には九時頃紀伊半島から、それぞれ一機づつで京坂神方面に侵入、若干投弾して脱去した。また一昨夜のは潮岬から侵入し、大坂市内に投弾し脱去したのだといふ。今日は二十七日から丁度四日め、或はひる過ぎからやつてくるのかも知れぬ。

一月三十一日(水)

(72) けふ昼からマリアナの敵めが大挙してやつてくるかと心待ちしてゐたが、遂に姿を見せなんだ。然し、夜間空襲も一応考へられるので勿論油断は出来ない。来るならいつでも来い。我に鉄壁の備へありと夕食を終ると間もなく寝た。フト眼をさますと警戒のサイレンが鳴つて居る。十一時二十分だ。起きて戸外に出ると、薄曇りの月明に風もなく静かな夜だ。敵機やいづこと空を仰ぐと、西北から聞へて来たのが例のウンウンの爆音。真上をさしてやつてくるらしい。たちまち待避の鐘があらでもこちら

でも鳴り出した。何分、夜は敵の所在がはつきり志ないので聊か心許ない。全神経を耳に集中し爆音を追っていると、どうやら市の北寄りを東にゆくらしい。もう危険の恐れもなく投弾した模様もない。暫くすると情報で、敵は浜名湖附近から洋上に脱出したことを伝え、程なく警戒警報は解除。ゆふべ一夜来なかつた丈なのに何か久し振りのやうな感がした。

侵入一機 四国より侵入三重県より渥美湾を経て脱去

〔解説〕 日誌の1月30日の敵機の来襲についての記述は、恐らくその後の新聞情報であろう。「三十日午前一時淡路方面から、同二時半頃四国方面から、更には九時頃紀伊半島から、それぞれ一機づつで京坂神方面に侵入」した。30日00時の来襲機はWSM152、02時半頃の機はWSM153、09時頃の機は3PR5M28に対応するのであろうか。WSM152とWSM153はいずれ

も大阪の目標に対して500ポンド一般目的弾12発、WSM154は同じく2000ポンド一般目的弾3発を投下した。3PR5M28は名古屋を目指したが、上空は完全に雲に覆われ写真撮影はできなかった。豊西村(1944~45)にも30日に敵機の来襲は記述されていない²⁰⁾。

米軍資料によれば31日にはWSM156~157の2機の大阪への、WSM158の名古屋への来襲があった(第13表参照)。また、WSM158の攻撃目標は名古屋の三菱重工航空機製作所であったが、名古屋の2次的都市にレーダーで2000ポンド一般目的弾3発を投下したことになる。日誌にある「十一時二十分」の警戒警報はこのB-29である。しかし、名古屋空襲を記録する会(1985)には被弾の記録がない。目下のところ、被曝した場所は三重県と考えられる²¹⁾。(つづく)

本稿(1) (2) (3)の正誤表

回数	号数	頁数	行数	誤	正
(2)	第2巻第2号	74	注4	工藤洋三(2013)	工藤洋三(2011) (76, 80頁同様)
〃	〃	91	注27	牛田町	牛川町
(3)	第4巻第1号	114	22回	1月14日の飛行ルート	1月19日の飛行ルート

受稿：2015年5月28日

受理：2015年7月9日

20) 30日から31日にかけてのB-29の来襲について『朝日新聞』は、「午前一時三十分頃同一機が淡路島方面から大阪に侵入府下に少量の爆弾を投下したが被害は軽微である」「午前三時三十分頃同一機が四国方面から大阪に侵入、市内北方地区に爆弾を投下したが被害は軽微である」「午前九時ごろ敵一機紀伊半島方面から和歌山、大阪方面へ侵入偵察を行つたが投弾はなかつた」(1945年1月31日付)、そして、「三十日十九時二十分と三十一日二時過ぎの二回にわたつて四国方面から大阪市内に侵入焼夷弾と爆弾を投下したが被害はほとんどなし」(同年2月1日付)と報じている。

21) 1945年2月2日付『朝日新聞』は、「三十一日午後九時ごろB29一機が愛媛県西部に侵入、山林中に爆弾を投下して高知湾方面から脱去」「同日午後十時卅分過ぎ同じく一機が高知、徳島方面を経て三重県下に侵入、水田、山林中に爆弾を投下して渥美半島方面から脱去」と報じている。三重の空襲を記録する会(1986)『三重の空襲時刻表』は、メモ欄で「桑名市郊外被曝」としている。